

# ‘-니까’の文法化をめぐる一考察

中西 恭子

## 1. はじめに

現代朝鮮語で「因果関係」、「契機」を主たる意味機能とする連結語尾<sup>1)</sup> ‘-니까’が、中期語の ‘-니’ から変遷、あるいは文法化したものであるという点については特に異論はみられない。そして ‘-니’ については 남기심・고영근 (1985/1997), 안병희 (1990/1998), 고영근 (1995), 이기문 (1998/2004) 等の教科書類や, 서태룡 (1988), 장윤희 (2002), 장요한 (2010) などの語尾研究で、連結語尾、終結語尾、先語末語尾それぞれの機能について体系的な記述がなされており、진병용 (1999) では中期語の ‘-니’ にテーマを絞って形態及び意味機能の分析を行い、その起源に対する検証も試みられている。

‘-니까’ については 성낙수 (1978), 남기심 (1978), 이상복 (1981), 남기심・루코프 (1983), 윤평현 (2005) をはじめ、‘-서’ との違いも視野に意味機能の解明が行われ、さらに ‘-기 때문에’ も含めた「因果関係」を表す語尾類の使い分けという教育学的観点からの研究も幅広く行われている。

しかし、‘-니’ から ‘-니까’ への変遷、具体的には ‘-니까’ の ‘까’ が何であるかについてはさほど活発な議論は行われてこなかった<sup>2)</sup>。本稿では、出現当初の ‘-니까’ の用例やそれに関する言及を手掛かりに、‘까’ が何かについて考察を試みたいと思う。

## 2. 先行研究

‘-니까’相当語について解説した最古の文法書は前間恭作（1909）であろう。同書には「原因理由となるべき語句を接続するもの」として以下のような記述がある（p.180）。

- (1) …後に来るもの、原因理由として語句を用ゐるときは「니」…の助動詞を付す  
但し口語にありては「ㅁ」「ㄷ」又「ㅁ드르」なる贅詞を添へて語呂を調ふる場合多し

前間は当時の‘-니까’相当語を「口語」とし、‘까’以下は「贅詞」、そしてその機能は「語呂を調ふる」ことにある、とみているわけである。また、「前の義にて後に来る語句が命令の意なるとき<sup>3)</sup>は「ㅁ」「ㄷ」「ㅁ드르」を用ゐず」（p.181）とし、後文が命令・勧誘の時は‘-니’のみが可能としており、現代語とは用法上の違いがみえる。

また、同書には「契機」にあたる用法も紹介されており（p.186-187）、前間が‘-니까’の用法が大きく2分されることを的確に把握していたことがわかる。

- (2) 「니ㅁ」の助動詞は口語にありては又此義にも用ゐらるゝことあり

「此義」とは、これに先行する‘-ㄴ즉’の説明を指し、例として‘이긔니까 아니 흥옵데다’（勝つたらもうしませんでした）と‘잡으려니까 드러 나옵데다’（捉へやうとした處が逃げ出しました）が示されている。

前間が、本稿でこのあと取り上げる“한불사언 [韓仏字典]”（1880）を参照しなかったとは考えにくい、項目は必ずしも一致しておらず、上掲の形態

「까」、「싼」、「싼드로」はすべて独自に収集した結果と考えてよいであろう。とはいえ前間恭作（1909）で実際に用例が示されているのは‘까’と‘싼’のみであり、‘(니)싼드로’については、“한불사언”に‘(니)싼도로’という似た形態がみえる以外は、1920年に朝鮮総督府により刊行された『朝鮮語辞典』<sup>4)</sup>に立項が確認されるのみである。

前間恭作（1909）に拠るところ大と考えられる同辞典では‘니까’、‘니싼’、‘니싼드로’が立項され、すべて「니①と同じ」と説明されている。「니①」の内容をそのまま引用すると（3）のとおりである。しかし‘니까’相当語に、‘니’と同様の「のに」という逆接の意味機能があったかは疑問である。

(3) 니①原因結果を表はす語句を連接する辭。から。故に。のに。たら。

바람이 부니 배가 못 들어 오겠다 (風が吹くから船が着くまい)  
仔細히 보니 잘 못되었다 (よく見たら間違であつた)

同時代の韓国人研究者が‘니까’に言及したものとしては최현배（1929/1999）がある。同書は‘-(으)니’、‘-(으)니까’を「事実拘束形」に含め（p.297）、その下位分類としていずれも（때）,（때문）,（까닭）を挙げている。加えて「順接的用法」、「逆說的用法」に用いられるものとして‘-(으)니’を（p.316）、‘참일（事実）’を表すものとして‘-(으)니까’、‘-(으)니’をこの順に提示している（p.505）。

時代は下るが허용（1999）もまた‘니’と‘니까’を区別せず、先行節の表す原因・理由・条件が「事実」であること認めつつ後続節に繋げるもの、と規定した。

‘니’の文法化については김완진（1957）が、動名詞語尾‘-ㄴ’に添詞‘이’が結合したものとしたが、전병용（1999）では「実現・完了」を表す連体形語尾‘-ㄴ’に「人・物」を意味する依存名詞‘이’が結合したものとしている。本稿もまた전병용（1999）と同じ見解をとるが、‘-ㄴ’と‘이’をどうみる

かはともかく、‘-니’が‘-ㄴ’と‘이’の結合形であるのは確かで、‘-니’の基本的な意味機能は、「～したこと、～であること」という実現・完了した事象（名詞相当）である。‘-니’はそれ自体、本来は特定の接続機能を有するものでないがゆえに、前文と後文の内容によってさまざまに解釈されてきた。

‘-니까’を対象とした近年の研究の多くは‘-니’との比較というより「因果関係」を表す他の形態との比較・使い分けをテーマとしたものである。성낙수(1978)では、「蓋然的動機誘発」の‘-어서’に対し‘-(으)니까’を「必然的動機誘発」とし、남기심(1978)は「原因」の‘-어서’に対し‘-(으)니까’を「理由」を表すものとした。また、이상복(1981)では‘-어서’が「後続節の行為や状態が実現する（または実現した）状態を表すもの」であるのに対し、‘-(으)니까’は「話者の推定による理由（原因）と当然の結果を表すもの」とし、남기심·루코프(1983)では‘-어서’を「原因を明らかにするもの(assertion of cause)」、‘-(으)니까’を「確認(argumentaiton)<sup>5)</sup>」、そして윤평현(2005)では‘-어서’を「一般的で普遍的な原因」、‘-(으)니까’を「話者個人の推論過程を伴った理由」を表すものと規定している。

一方、‘-니’から‘-니까’への文法化をテーマとした先行研究は안주호(2006)、송대현·황경수(2013)など数本に留まる。서태룡(1988)は活用語尾全体の研究の中で‘-니까’の‘까’を疑問の終結語尾と関連づけて検討する必要に触れており(p.83)、안주호(2006)もそれを支持する立場をとっているが検証には至っていない。송대현·황경수(2013)では‘-니까’の文法化を主たるテーマとしつつも、‘까’が何かについては掘り下げられていない。

### 3. ‘-니까’の出現

‘-니까’の出現が19世紀というのは先行研究の一致するところであり、송대현·황경수(2013)では連結語尾‘-니까’の初出として次のような“독립신문 [獨立新聞]”(1898)の用例を引いている<sup>6)</sup>。

(4-a) 본사 보고원이 (… 자세히 안 후에야) 드리 오라고 흥미 드리 간니신 관  
스 검사가 좌우에 안자논디 <1896.4.11> (本社の報告員が〈…詳細が  
わかってようやく〉入れと言うので、入って行ったところ判事・検事  
が左右に座っているのだが)

(4-b) (남) 씨의게 말 흥야 그 표지를 닐여 달나 흥니신 남씨가 그 표지를 김  
씨의게 주엇더니 <1899.7.6> (南氏に言<sup>て</sup>その標紙を出してくれと言  
うので南氏がその標紙を金氏に与えたところ)

同新聞にはほかに以下のような例も見え、この時期には ‘-니신’ の使用が  
ある程度一般化していたことがわかる。

(5) 은이나 금으로 돈드러도 좋시 무거오니신 가지고다니기가 편리치 안  
호로 <1896.4.28> (銀や金で作っても終始重いので持ち歩きに不便なた  
め)

しかしこの時期の ‘-니까’ に相当すると思われる形態としては、同論文が  
挙げる ‘-니까/-니ㅏ/니까’ 以外にも様々な形態がみられる。“세종말뭉치”<sup>7)</sup>  
を用いて ‘-니까’ およびそれに相当すると思われる形態をすべて検索してみ  
た結果、(6) のような形態が収集された。‘니깐, 니깨, 니껴, 니스깐,  
니스거, 니스ㅏ, 닷간, 닷거’ のような想定形、及び前間の挙げた ‘(니/닛)  
썬’, ‘(니) 썬드로’ は同コーパスでは確認できなかった。

(6) 니ㅏ, 니까, 니스ㅏ, 니ㅏ, 니썬, 니썬도로, 니ㅏ, 니썬, 닷가, 닷가

これらのうち最も古い時期のものは、“남원고사 [南原古祠]” (1864) に終  
結語尾としての使用が確認される ‘-닛가’ である。終結語尾 ‘-니까’ は連結  
語尾 ‘-니까’ が機能を拡張し、あるいは後文が省略されて終結語尾のように

用いられるに至ったとの解釈は再検討を要する<sup>8)</sup>。

(7) 농부다려 흔는 말이 담빅불 줌 붓치즈닛가 〈남원고사21b〉  
(農夫に言うに「ちょっと煙草に火を付けようや」)

(8) 다시 보즈닛가 하직히고 흔 곳을 다드르니 〈남원고사29a〉  
(「また会おうや」と別れを告げ、ある場所に至るに)

‘-자니까’に相当する用例は、ほどなく“매일신문 [毎日新聞]”に連結語尾として現れる。

(9) 각급 히려셔도 출립을 줌. 흔자닛가 자연히 사름을 줌 사귀려고 남의게 비위맛췌워 〈1898.7.7〉(嫌でもちょっと何かを始めようと思えば、自然と人とも付き合おうと他人に取り入り)

一方、“한불사던”(1880)には連結語尾‘-니까’の多彩な形態が収録されている。同字典は1873年に、朝鮮語を学ぶフランス人宣教師のために、フランス人宣教師Ridel(1830-1884)と信徒・崔智赫(1808-1878, 忠清南道公州出身)を中心に編纂されたもので、刊行年の1880年というのは日本・横浜で出版された年である。したがってここに収録されている語の使用は、崔智赫の年齢を考慮してもさらに数十年遡るものとみられ、“남원고사”(1864)とほぼ同時代のものと言える。

同字典では、おそらくは項目の配列を間違えた結果、‘-니까’相当語の一形態、‘한도로’を2か所に重複して立項している。(10-1)と(10-2)でTermin(終結): Comme(～なので): pour cette raison(このために)という説明は共通しており、(10-2)ではさらにparce que(なぜなら), par consequent(したがって)という説明が付加されている。

同辞典の‘한도로’は前間恭作(1909)が‘한드로’として収集したものに

〈表1〉 “한불사언” (1880) の ‘(니) 싨도로’ 関連項目

辞書項目	別表記／類	用例	意味
(10-1) 싨도로	싨도로	가니싨도로	Comme j'étais allé (私が行ったので)
(10-2) 싨도로	싨노로	헉니싨노로	Il dit et par conséquent (彼は言うので)
	싨다로		
	싨니	죽으니싨니	Comme il vint à mourir (彼が死んでしまったので) parce qu'il mourut (彼が死んだので) il mourut et par conséquent (彼は死んだので)

当たると考えられ、他に用例がないため断定は難しいが、現代語の南部方言 ‘니까드로’, ‘니까두로’, ‘니까두루’ 類に繋がるものであろう。황병순 (2012) ではこれらを「‘더러’が‘드로’, ‘두로’, ‘두루’などに変異し接続語尾に添加されたまま化石化したもの」と見ている (p.85)。しかし ‘더러’の語源 ‘드려’ (←드리-+어) は同時代にも ‘드려’の形で現れており、(10-1) “가니싨도로”のフランス語訳 ‘Comme’に「～なので」のほか「～として」、「～のように」の意があることから考えても、‘드로’, ‘두로’, ‘두루’類はむしろ ‘본래의 상태대로’ (本来の状態のまま <“표준국어대사전 [標準國語大辭典]”>)の意を表す副詞 ‘도로’とみた方が自然である。そうであるならば ‘니싨도로’, ‘니싨도로’は、前文の内容を事実として受け入れたうえで、「～であること(が)そのままに」くらいの意を後文に繋ぐものと読み解くことができる。

#### 4. ‘니까’の‘까’とは何か

‘니까’について “표준국어대사전”は「[어미] ‘-니’를 강조하여 이르는 말」(語尾。‘-니’を強調して言う言葉)と説明するのみである。3で見たように ‘니까’は最初、主に ‘니싸’, ‘니쌌’, ‘닛가’のような形態で現れる。‘-니’は前述のように、連体形語尾(あるいは動名詞語尾) ‘ㄴ’に依存名詞

(あるいは添詞) ‘이’ が結合したもので、名詞相当語であることは間違いない。連結語尾 ‘-니’ の意味機能については、「理由」のほか「後文の前置き」として「～すると」、「～したら」、「～であるが」等さまざまで、その多様さ故に却って、単純に前文と後文を繋ぐだけで特別な意味機能をもたない語尾、とさえ言える。

では ‘-가/-마’、あるいは ‘가/마’ が何かということであるが、‘니’ が用言でない以上、語尾という選択肢はなく、助詞あるいは名詞類ということになる。황명순 (2012) はこれらを方言研究の観点から「文脈助詞 (補助助詞に近い)」、「様態助詞」、「談話標識」のいずれかであるとし、口語に特有の、文法的機能をもたない「談話標識」と見ている。これは前間の「贅語」に近い。

しかし ‘-니’ と ‘-니까’ では前者がより多様な意味機能をもち、文解釈上の困難を伴うことを思えば<sup>9)</sup>、単なる「贅語」、「談話標識」で処理するのは適切ではない。ある形態のもつ意味機能が多様に過ぎる場合、言語使用に際して意味機能の限定化、特定化に対する欲求が生じるであろうことは容易に想定できる。전병용 (1999) は ‘-니’ の後に「理由・原因」、「条件」、「対立」などの意を添える「接続副詞」がしばしば出現すると指摘している。

- (11) 접속어미 ‘-니’ 다음에 [이유/원인] 의 접속부사 ‘그럴씩, 그런드로’, [조건] 의 접속부사 ‘그러면’, [대립] 의 접속부사 ‘그러나’ 등이 올 수 있다는 사실로부터 이 접속어미 ‘-니’ 에 고유한 의미 기능이 있는 것이 아니라 ‘ㄴ+이’ 라는 구성이 명사문 종결의 기능을 하면서 ‘-니’ 앞에서 선행절의 의미 내용이 일단 완결되었다가 후행절에 연결되는 것으로 볼 수 있다. (p.184-185)

(接続語尾 ‘-니’ のあとに [理由/原因] の接続副詞 ‘그럴씩, 그런드로’、[条件] の接続副詞 ‘그러면’、[対立] の接続副詞 ‘그러나’ などが後続し得るという事実から、この接続語尾 ‘-니’ に固有の意味機能



があるのではなく、‘ㄴ+이’という構成が名詞文の終結として機能しながら‘니’の前で先行節の意味内容が一旦完結し、後行節に連結するものとみることができる)

“세종말뭉치”を用いて‘니’に後続する接続副詞の例を拾ってみると、次のようなものが現れる。

(12-a) 惑障을 그쳐 다오샤샤 智現 前타 히시니 그런드로 大通入 機 應히샤  
미 이 곧히시니 그럴씩 王子 | 讚歎히스와 니르샤디 <法華3:92b>  
(惑障を断って修行されてこそ智が現れるとおっしゃり、それゆえ大通の機に应じるにこのようでいらっしゃる、そのため王子が讚歎申し上げておっしゃるに)

(12-b) 優婆吉이 또 닐오디 드토면 모로매 게우리 잇는니 그러면 如來入 舍利  
므스기 利益 드외시리이고 <釋詳23:55b>  
(優婆吉がまた言うに、争えば須らく敗者が出る、そうであれば如來の舍利が何の利となられましょう)

(12-c) 識性を 뭐우디 아니히고 또 ㄹ장 더 업게히니 그러나 識을 브터 업게  
힐씩 乃終 내 진딧 업수미 아니니 <月釋1:36a>  
(識性を働かせず、また極限まで無にする、しかし識を付して無にする故、遂には真のなきことにあらず)

これらを前文・後文とみるべきか個々の独立した文とみるべきかについては議論もあるが<sup>10)</sup>、‘니’によって実現かつ完了した何らかの事実が提示され、それに続く文との関係をより明確にする文法要素が立ち現れる条件は十分に整っていたと言えよう。上でみた副詞‘도로’もこのような意図の表れであろう。

接続詞や副詞のみならず、例えば‘그게’を続けることでも、前文と後文の関係はより明確となる。

- (13) 국문으로 쓴 건 조선 인민이 도로혀 잘 아러보지 못ㅎ고 한문을 잘 알 아보니 그게 엇지 한심치 아니ㅎ리요. <1896.4.7> (国文で書いたものは朝鮮人民が却ってよくわからず、漢文はよくわかる、それがどうして嘆かわしくないことか)

文献上の‘-니 그게’は“독립신문”から引いた(13)が初出であり、上述のように‘-니까’相当語の登場はこれより早い。しかし(14-a)にみるように、「AそれがBだ」の意の‘-니+기’は古く15世紀からみられ、17世紀の用例(14-b)では、‘기’が‘-니’の「因果関係」という意味機能をより明確にする働きをしている。‘-니 그게’が文献に現れるに先立ち、口語で(14-c)のような変遷が起こっていたことは十分考えられる<sup>11)</sup>。

- (14-a) 不用處는 쓰디 아니ㅎ는 고디니 기 無所有處 | 라 <釋詳3:35b>  
(「不用處」は使わない所であり、それが「無所有處」である)

- (14-b) 진시 스물 다스식 죽습고 이구로 니엇습다가 아기 스물 여스식 죽스 오니 기 다 내의 적양인 줄은 아읇건만은 <김일근\_언간의연구.txt (208) 萬曆三十一年>  
(夫が25歳で亡くなり、ようやく忘れたと思つたら子どもが26歳で亡くなつた、それが <亡くなつたので>すべて自分の積殃だと思つたのだが)

- (14-c) 니 + 그게 → \*닉게 → 니께 → 니까

‘-니까’の意味機能にも「因果関係」と「契機」の別があり1つに限定され

るものでないとはいえ、‘그게’のような語を伴うことで‘-니’に比べ前文と後文の接続関係ははるかに限定・特定されたものとなるのは確かである。

一方で、‘-니까’の‘가’が‘그게’由来ではなく、主格助詞‘가’そのものであった可能性もある。‘-니’は通常‘-ㄴ+이’と分析されるが、전병용(1999)では‘-노니’の‘니’を‘ㄴ(冠形詞形語尾)+이(依存名詞)+이(主格助詞)’と分析し(p.41)、『-ㄴ+이+이(主格助詞)’と分析可能な‘-니’が存在したと述べている。‘-니까’が登場した19世紀には既に主格助詞‘가’は定着しており、‘니’(～する/したこと)に結合していた‘이’に代わり‘가’が用いられたとしても不思議ではない。その場合、‘ㄴ’は‘가’の混用であろう<sup>12)</sup>。

ハンゲルの正書法を論じた20世紀初めの学者や文筆家の投稿記事にも‘-니까’相当語は数多く目撃されるが<sup>13)</sup>、1916年に「研語生」が“學之光”第10号に寄せた記事に‘까’解明の手がかりとなる使用がみられる。同記事では(15)にみるように「理由」、「逆接」などを表す連結語尾としては、未だ‘-니’が使用されている。

(15-a) 青年學生들의 腦髓만 煩悶케 하니 實行은 姑舍하고 迷亂을 作할 筈이  
로다.

(青年学生の頭を煩わせるのみで、実行どころか混乱を引き起こすのみだ)

(15-b) 一遵한 法則이 無하니 何를 標準하여 實行을 圖할이오

(従うべき法則がないのに、何を標準として実行を図ろうか)

同記事に唯一現れた‘-니까’が(16)である。

(16) 朝鮮語研究라하니까 現今 使用하는 外來語… 다 放逐적이고 朝鮮古代  
語를 搜索하여 使用함이 根本目的인 줄로 알고 …世界는 율이라하자

## 하더라

この用例は、「朝鮮語研究だというので、今日使用している外来語…すべて捨て去り、朝鮮古代語を搜索して使用することが根本目的だと思い…「世界」は을としようと言うのだ」と訳すことができ、‘-니까’は通常「理由」と解されるわけであるが、日本語訳の下線部は「というものが」であっても文意は変わらない。つまり、‘-니+가〈主格助詞〉’を潜在的に意識しつつ、‘ㅏ’を介在させることでそれとは弁別化された‘-니까’を「理由」の語尾として用いたとの解釈も可能だということである。

さらに付言すれば、中期語の連結語尾 ‘-르시/-르씨’は古代語の ‘시 ㅏ’ (蓋然連体形 ‘-르’ + 依存名詞 ‘ㅏ’ 〈こと〉 + 主格助詞 ‘ㅣ’)、あるいは ‘시 ㅏ’ (蓋然連体形 ‘-르’ + 依存名詞 ‘ㅏ’ + 処格助詞 ‘이/의’) に遡るとされるが、例えば (17) のような例では ‘시/씨’ を ‘ㅏ + ㅣ’ とみたほうが自然である。元の漢文に ‘모호다오릴씨’ の ‘-르씨’ にあたるものはなく、‘이릴씨’ は「是故」を訳出したものである。

- (17) 하다가 아릿 慧 업스면 讀誦호미 비록 하나 부텃 뜯 아디 모호다오릴씨  
이릴씨 聖人ㅏ ㅏ들 사겨 학자의 疑心을 그쳐버리노니 〈금강序：6a〉  
(もし前世の慧なければたとえ読誦多くとも仏意を知り申し上げることができないことが 〈知り申し上げることができないので〉、このようなので聖人の義を解し学者の疑心を断ち切るのである)

また ‘ㅏ’ の ‘ㅏ’ は主格助詞や繫辭の前で脱落するため、‘-르씨’ は (18) にみるように ‘-르씨’ とともに表記されるが、名詞句に主格助詞が結合した「～であろうことが」が「理由」の意味機能を獲得したケースとして ‘-니까’ との類似性が注目される。

- (18) 브리 能히 몸 하야버릴 돌 저티 아니홀씨 일후미 不驚이오 〈法華

2:60a)

(火が身を焼くことを恐れないことが〈恐れないので〉名前が不驚で)

## 5. 結びにかえて

3で見たように ‘-니까’ は19世紀半ばに、まずは口語、それも方言の可能性がある文献に終結語尾として突如現れ、半世紀もたたずして、表記法にばらつきこそあれ文法化が確立し、文章でも広く用いられるようになる。そのため具体的な用例にその形態の変化を追うことは難しく、4での議論も状況証拠的な検証に終始したことは否めない。今後さらにこの論を補強する必要はあろうと思うが、言語使用における心理に立脚し、類似の文法化現象と併せ考えるなら、‘-니까’ の ‘까’ はそれが ‘그게’ 由来にせよ主格助詞 ‘가’ そのものであったにせよ、主格助詞を結合させることで、‘-니’ がもつ多様な意味機能を一定の範囲に限定するものであったと言えよう。

なお“한불사단”のフランス語の解釈では小林亜美先生にご助言を賜った。ここに記して謝意を表したい。

### 註

- 1) 引用文献で「接続語尾」としているものについてはそれに従う。
- 2) 리의도 (1990) は、19世紀末頃に出現した ‘-으니ㅅ’ は ‘-으니’ に ‘ㅅ’ が融合したものであるが ‘ㅅ’ の正体は不明、としている。
- 3) “날이 저므니 어서 가자” (日が暮れるから早く往かうじゃないか) のような「勧誘」もここに例示されている。
- 4) 1976年、亜細亜文化社刊、韓国学文献研究所編。
- 5) 原文が ‘따짐’ であるためその意を反映させたが、英語自体の訳としては「論証」ぐらいが適当であろう。
- 6) ( ) 部分は대한민국 신문 아카이브 <https://www.nl.go.kr/newspaper/index.do> により本稿で補った。
- 7) ‘국어사 자료 말뭉치’, “21세기 세종계획 국어 기초 자료 구축” 2. (국립국어원, 1999)
- 8) 例えば김혜지 (2016) は、連結語尾 ‘-니까’ が未だ終結語尾化の過程にある

とし、 국립국어원도 ‘니깐’ についてではあるが次のような見解を示している。“연결 어미 ‘니까’ 에 보조사 ‘ㄴ’ 이 결합한 ‘니깐’ 을 종결 어미로 쓰는 것은 적절하지 않습니다. 다만 대화 맥락 속에서 청자가 ‘니깐’ 뒤에 이어지는 말이 무엇인지 분명하게 알 경우 뒷말을 생략하고 쓸 수도 있는데…” (連結語尾 ‘니까’ に補助詞 ‘ㄴ’ が結合した ‘니깐’ を終結語尾として用いるのは適切ではありません。ただ對話の脈略で聴者が ‘니깐’ の後に続く言葉が何であるか明らかにわかる場合、後の言葉を省略して用いることもできますが… 〈下線は筆者〉)。それに対し연세대학교 언어정보개발연구원 편 (1998/2007) では ‘니까요’ という形態で立項して「해요체의終結語尾」としており、既に“한불사던”でも“하분 [下分] (Partie inférieure 〈下部〉)”に続けて、“하분하니까” (Oh! combien c'est vexant 〈ああ、忌々しいったらない〉) が見出し語として立てられている。

- 9) 연세대학교 언어정보개발연구원 편 (1998/2007) では、‘니까’ で置き換えることができない ‘니’ の意味機能として、①前に記述した事実を後で再度敷衍して説明する場合、②前の事実が後の事実に対する譲歩的条件を表す場合、③前で提示された問いを解き明かす内容となっている場合を挙げている。つまり、‘니까’ はこれら以外の意味であることをより明確にする必要から用いられ始めたと言える。
- 10) 고영근 (1990), p.16 参照。
- 11) 15世紀には訳出されない ‘게’ が ‘니’ に後続する例もみられる。“여러 使臣의 徵求하는 符牒 二百 나마닐 바도니 게 다 닐오되” 〈杜詩 25:36a〉 (諸使の徵求、符牒二百余封を承く。皆曰く)
- 12) ‘니까’ が ‘니마’ の形で現れる “여소학” (1882) では主格助詞 ‘가’ も ‘마’ で表記されている。“집미데그 칠팔세에 언문 디강 통하야” 〈題辭 2b〉 (うちの義弟가 7, 8 歳に諺文大綱を通じて)
- 13) “그 사람을 모르는 터도 아니니까… 適當하달는지도 모르요” (その人を知らないわけでもないので… 適當なのかもしれない) 〈洪憲, “開闢” 第 62 号, 1925〉, “넘우 급하게 되고 넘우 간단하게 대답하더니까 넉넉히 그 까답을 말할 수 없고” (あまりに急いであまりに簡単に答えたので、十分にその理由を語ることができず) 〈한결, “東光” 第 9 号, 1927〉 など。

#### 参考文献

- 고영근 (1990), ‘문장과 이야기의 관련성에 관한 연구 —중세어를 중심으로—’, “冠嶽語文研究” 제 15 집, 1-47.
- 고영근 (1995), “표준 중세국어문법론”, 탑출판사.
- 김영규 (2017), ‘연결어미 ‘으니까’ 의 방언 분포와 분화’, “冠嶽語文研究” 제 42 집,

337-361.

- 김영옥 (1995), “문법형태의 역사적 연구 —변화의 이론과 실제—”, 박이정.
- 김완진 (1957), ‘-n, -l 동명사의 통사론적 기능과 발달에 대하여’, “국어연구” 2, 서울대 국어연구회.
- 김혜지 (2016), ‘연결어미 ‘니까’의 종결어미화에 대한 연구’, “이화어문논집” 제 40집, 79-99.
- 남기심 (1978), “언어학개론”, 탑출판사.
- 남기심·고영근 (1985/1997), “표준 국어문법론”, 탑출판사.
- 남기심·루코프 (1983), ‘논리적 형식으로서의 ‘-(으) 니까’ 구문과 ‘-어서’ 구문’, “국어의 통사·의미론”, 탑출판사.
- 리의도 (1990), “우리말 이음씨 끝의 통사적 연구”, 어문각.
- 서태룡 (1988), “國語 活用語尾의 形態와 意味”, 탑출판사.
- 성낙수 (1978), ‘[이유, 원인]을 나타내는 접속문 연구 —{아서}와 {니까}를 중심으로’, “연세어문학” 제 11집, 23-39.
- 송대현·황경수 (2013), ‘한국어 연결어미 ‘니까’의 문법화 연구’, “새국어교육” 제 96호, 321-343.
- 안병희 (1990/1998), “중세국어문법론”, 학연사.
- 안주호 (2006), ‘현대국어 연결어미 {니까}의 문법적 특성과 형성과정’, “언어과 학연구” 제 38집, 71-91.
- 연세대학교 언어정보개발연구원 편 (1998/2007), “연세한국어사전”, 두산동아.
- 윤평현 (2005), “현대국어 접속어미 연구”, 박이정.
- 이기문 (1998/2004), “新訂版 國語史概說”, 태학사.
- 이상복 (1981), ‘연결어미 ‘-아서’, ‘-니까’, ‘-느라고’, ‘-므로’에 대하여’, “배달말” 5, 55-80.
- 이용 (2003), “연결 어미의 형성에 관한 연구”, 역락.
- 장요한 (2010), “15세기 국어 접속문의 통사와 의미”, 태학사.
- 장윤희 (2002), “중세국어 종결어미 연구”, 태학사.
- 전병용 (1999), “중세국어의 어미 [니]에 대한 연구”, 청동거울.
- 최현배 (1929/1999), “우리말본”, 정음문화사.
- 河東鎬 編 (1986), “한글論爭論說集 下”, 歷代韓國文法大系 3-23, 塔出版社.
- 허웅 (1999), “20세기 우리말의 통어론”, 샘문화사.
- 황병순 (2012), ‘-으니까’ 방언형의 형태론’, “방언학” 제 15호, 75-112.

前間恭作 (1909) 『韓語通』

\* 京都大学国文学会 (1974) 『前間恭作著作集 上卷』 に収録

キーワード

‘니’, ‘넋가’, 因果關係, ‘르ㅅㅅ/르ㅅㅅ’